



各都道府県が  
取り組む  
教育改革

## 香川県

実社会の変化は確実に学校のあり方に影響を与えている。国際化や情報化などさまざまな要因によって社会は複雑化してきたが、近年よく耳にする生徒の学びに対するニーズの多様化もこの影響によるところが大きいと考えられる。教育へのニーズの変化に対応すべく、今、各地で学校改革が始まっている。香川県でも高校教育改革を展開し、授業や学校の多様化、生徒のニーズへの対応を進めている。詳しい改革の内容を、同県教育委員会に伺った。

### 生徒に授業の幅広い選択を

香川県の高校での教育改革の柱は大きく三つ。生徒の選択幅の拡大、学科などの改編、入試改革である。

まず、平成7年度に教科・科目の選択幅を拡大した高松桜井高校を、翌年には単位制総合学科のある三木高校を新設。この2校をモデルとし、平成8年4月、既に設置されている三本松高

校を含めた4校を高校教育改革推進校に指定し、授業の選択幅の拡大、学科の改編を実施した。これに続いて現在各高校で教育課程の見直しが行われている。

「これらの高校では教育内容の多様化を図るため、従来の学習指導要領にはない教科・科目である『その他の教科・科目』を設置するなど、生徒の選択の幅を広げる試みがなされています。生徒は自分の興味・関心などに応じて授業を選べるようになるのです」と語

# 生徒の多様化と ニーズの変化に 対応した改革

るのは、香川県教育委員会事務局高校教育課課長補佐の石井文男先生。

具体的には、選択幅を広げるため既存の科目に対しては必修を少なく、選択を多くする。さらにその他教科・科目を新しく作ることもある。例えば、英語の中に実用英語や速読英語という科目を作ったり、福祉や国際文化という教科を作るケースだ。その他教科・科目は、学習指導要領では地域、学校および生徒の実態に応じて、必要がある場合に設置できるとされている。

積して、学校に提供できるようになればと考えています。」

### 選択幅の広がった 学科と入試制度

生徒のニーズの変化に応じ既存の学科を改編することも、改革の一つの柱だ。香川県の高校の中には、学科の中に「コース」や「類型」を置いているところがある。コースは入学後のある時期に個人の希望で分かれ、類型は入試の段階から既に分かれている。現在新しいコースや類型を作り、そこに生徒のニーズにこたえるカリキュラムを設けている。例えば、造園学科を環境デザイン科に改め、その中に造園緑地コースと草花総合コースを設置。女子の関心の高いフラワーアレンジメントなどを学べるようにした。従来は男子のイメージが強い学科だったが、女子にも興味を持ってもらうことができた。また家政科を生活文化科に変え、デザインを学びたいという高いニーズにこたえるため、生活教養コース、食文化コースのほか、服飾デザインコースを設置した。類型では、英語に重点を置いた国際類型、体育の授業数が多い体育類型などが誕生している。

「環境デザイン科は以前よりも志願者に女子が増え、生活文化科も志願倍

率がアップしました。もちろん、進学を主目的にした普通科も従来どおり存在します。生徒のニーズに合わせたいろいろな学校があつてよいと考えています。各学校を縦の序列から見ただけではなく、横にもバラエティーを持たせ、生徒が選べるようにしたいのです。」

また、香川県では、入学後の選択幅を広げるだけでなく、入学前においても生徒に選択の幅を与え、同時に、生徒のニーズにこたえられる環境を整えていこうとしている。

入試では、推薦入試や傾斜配点、さらに「5%規定」を導入した。傾斜配点では、学科の特性などから入試で重視する1科目を指定し、もう1科目は生徒に得意科目を自己申告させる高校が多い。「5%規定」では、定員の95%は調査書の学習の記録と学力検査の成績という二つの相関から学力を判定し、残り5%は調査書の学習の記録、また

は学力検査の成績のいずれかで学力を判定する。

「傾斜配点は個人の得意、不得意に対応するためのもので、生徒の特性を評価します。『5%規定』は試験当日に緊張しすぎて失敗してしまつた生徒や、中学校時代部活動などに一生懸命になりすぎて不本意な成績しか残せなかつた生徒に配慮するためのものです。」

### 各高校に 個性を持たせる

これらの改革を行うほかに、香川県では『34の高校』作り推進事業を実施している。選択幅の拡大だけでなく学校独自の取り組みを行い、特色ある学校作りを進めようとの試みだ。

その一つがマイスクールプラン支援事業。高校あるいは学科の特色を生かし、地域に根差した高校の活動を支援する。普通科高校のボランティア活動

「個々の学校でその他科目を作り、授業内容を考えてもらいます。学校の裁量が大きい制度だといえるでしょう。ただし、ある1人の先生が得意な分野をその他科目にするということでは困ります。その先生がいなくなつても継続できることが大前提です。」

また、新しい試みとして社会人講師招聘事業も行っている。実社会で働く人の生の話を聞き、机上で終わらない学習を生徒にさせようと始められた事業だ。授業の幅を広げられるだけでなく、一つの分野に精通した専門家から学ぶことで、生徒たちは最新の技術と知識に触れることができる。アナウンサーによる国語の朗読指導の授業、気象予報士の地学の授業、獣医師の牛の人工授精に関する授業など、高校で勉強していることが将来、社会でどのように役立つのか、生徒が実感できる貴重な機会となる。

「将来的には、教育委員会で講師にふさわしい人材をリストアップし、蓄工業高校のロボット製作、農業高校の市民家族農園など、すべての事業で地域住民との触れ合いが重視されている。もう一つが海外交流支援事業。海外でホームステイを行うなどの海外語学研修や海外の学校訪問を行う。」

「これらの事業を展開するにあつて、高校側には開かれた学校作りと、生きる力を育成する二つの視点を提示しました。ただロボットを作るだけでなく、それを見せるために地元の小中学生を招待し交流を持てば、開かれた学校作りに一役買うことになりました。また、国際交流活動や福祉活動なども、社会の変化に対応できる能力を身につけるといふ観点から、生きる力の育成に寄与すると考えています。」

これらの改革は制度というハード面の改革である。それに加えソフト面の改革の必要性を感じているという。「教員の資質向上という面において、改善の余地があると考えています。授業の選択の幅を広げるなどの改革を行うつても、授業が従来と同じであつては意味がありません。生徒の問題解決能力や、思考力を高めるために、日々の授業を実践する中での改善が求められています。今後、画一的ではなく、教師の希望で必要に応じて選択できる研修などの強化を図りたいですね。」



香川県教育委員会事務局高校教育課課長補佐  
石井文男 Ishii Fumio

23年間、地歴科の教師として教鞭を執つたのち、主任指導主事として県教育委員会事務局に3年在籍。そのあと2年間、坂出高校の教頭を務め、現在にいたる。香川県の高校生については、「基本的にまじめで素朴な生徒が多い。だが、さらにもっと覇気があれば」と感じている。

香川県の高校教育改革推進校の一つである三本松高校は、平成9年度から授業の選択幅を拡大した新しいカリキュラムを施行し、さらに普通科に国際コミュニケーション類型を設置した。同校の和田浩校長にお話を伺った。

## 2学期制を導入し、 選択幅拡大に対応

三本松高校は授業選択幅の拡大を実施すると同時に、2学期制に移行した。「通常、授業は1年間通して履修しなくてはなりません。それよりは生徒が興味・関心に応じて、ある期間ごとに自分の取りたい科目を履修できる方が、選択授業の幅広さが生きてきます。3学期制のまま1学期ごとに履修を済ませるのは、各学期の期間が異なるため到達目標に届かない科目も出てくるなど、事実上困難です。」

授業選択幅の拡大が本格的に行われるのは3年生であるが、9年度からの取り組みのため対象は今年度の1、2年生の

各都道府県が  
取り組む  
教育改革

香川県

事例紹介

香川県立三本松高校

# 授業の選択幅を拡大し 興味・関心・進路から 生徒に選択させる

み。そのため、今は3年次での本格的導入に向けて必修科目を履修している段階だ。

「生徒にはこの試みの意味をガイダンスや集会、個人面談などで徹底して伝えたいです。保護者にも保護委員会、三者面談などで理解してもらっています。」

各授業でなにを学ぶかは、シラバスを作成し授業内容の明確化に努めている。

だれがどの科目を受け持ち、どのような授業を行うかは、教科会で話し合い検討を重ねる。教師同士で授業研究を深めるよい機会ともなっている。

「この改革への戸惑いや不安がなかったわけではありません。しかし、先生方にとってはより充実した授業への期待感の方が大きかったです。」

## 成果を実感するが これからが本番

改革の一環として、授業の選択幅の拡大の実施と同時に行われたのが、国際コミュニケーション類型の設置である。

国際コミュニケーション型の生徒をオーストラリアへ語学研修につれて行ったとき、現地ではかの日本人高校生と比べて積極的に、英語力も大学・短大レベルと高い評価を受けた。授業にディベートを取り入れ、オーラルコミュニケーションを重視した成果だ。

「生徒1人ひとりを伸ばすための改革が授業の多様化、学校の個性化につながればと思っています。生徒には自分の将来を考えて選択してもらいたい。大変そうだからといって自分にプラスになる授業を避けるなど、安易な方に流れたりしないよう、教師の側でも注意する必要があると思います。」



香川県立三本松高校校長  
和田浩 Wada Hiroshi

三本松高校は、国際コミュニケーション型のある普通科と理科科からなる、創立が1900年という伝統ある高校。和田校長は、教育委員会の高校教育課と障害児教育課に合わせて7年間在籍。その後高松養護学校に校長として赴任。2年間務めたあと、今年度より現職。